

万葉の世界

情景を想像すると

石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔
成来鴨

磐はしる垂水の上の早蕨の萌えいずる春に
なりにけるかも

志貴皇子のこの歌は万葉集の中でも私の好きな歌の一つになっています。

垂水とは「滝」のこと。白糸の滝や浄蓮の滝のように垂直に落ちている滝ではあるまいというのが私の感覚です。垂に水だから上から落ちていく、そう解説した生徒がいましたが、この漢字解説に見事とは思いましたが、私の感覚にはフィッシュじゃないのです。それは、「磐走る」という「滝」につながる枕詞のもたらす効果だと思っております。枕詞は、ある言葉の決まった形容語だと説明されています。「垂乳根の」と言えば「母」です。「草枕」といえば「旅」です。

でも、定型の形容語という説明よりも、もっと

実感があると感じます。早春の雪解け水をいただいた溪流が音をたてて流れ下る。その真ん中に磐が幾重にも重なっている。緑の水藻がつき水しぶきをあげて磐を襲うような情景が目には浮かびます。「磐走る」、これは、何段にも下り降りるような滝と私には思えるのです。そう想像すると「磐走る」という言葉が実に的確な形容語だと感じるのです。

「磐走る」というほとぼしるような感じ、早蕨の「さ」に込められたみずみずしさ、萌えいずる春という早春の雰囲気、しかも区切れなく一気に読み込まれる調べ、それらが一つになって、これらの歌の世界を醸し出しているのです。

志貴皇子は天智天皇の第七皇子と一般には言われていますが、一説には、天武天皇の皇子（磯城皇子）であろうという人もいます。

天智天皇の第七皇子だとすれば、白壁王、光仁天皇の父になります。彼の歌は柿本人麻呂よりも新しく流麗明快と言われていますが万葉集全体でも五首しかありません。

志貴皇子が比較される柿本人麻呂朝臣の歌から私の好きな歌を紹介します。

東の野に炎の立つ見えて返りみすれば月傾きぬ

この歌は、柿本人麻呂が軽皇子に従って大和国宇陀郡安騎野に宿った時の短歌だそうです。東からゆらゆらと曙光がさがります。振り返る

と西の空に月が沈もうとしているのです。何という広い世界でしょうか。これは、一八〇度の世界の歌、と言った方がいますが、まさしく、東から西の一八〇度の歌なのです。

実は、この歌の詠まれた場所がこう特定されると、詠まれた月日、時間まで特定できます。国語でもなければ、国文学でもない。天文学の知恵を借りるのです。日が昇る時間に月が沈むとなれば、そう度々あることではありません。図書室にFM-TOWNSという古いパソコンがあります。そのソフトの中にハイパープラネットという宇宙を学ぶソフトがあります。そのソフトで、緯度と経度とこの条件を打ち込んで検索させると特定できるのです。私も何年か前にこれをやってみたのです。

まさしく、この歌は天地に流れる時間のおもしろさを歌った歌でもあるのです。

菜の花や月は東に日は西に 与謝蕪村

与謝蕪村のこの句は、万葉集の人麻呂の歌とは全く逆の世界です。夕刻の日没時を詠んでいます。蕪村四十八歳の作と推測でき、天文学的考証をすれば、旧暦の十四日か十五日の情景を詠んでいることになるそうです。

地の菜の花の黄色、沈もうとしている夕日の赤。蕪村は画家でもあります。この絵画的なすばらしさは彩色が施されていて見事です。